



河上社長

InsureMO社 注目集める新技術「マイクロサービス」

APIでつながるエコシステム構築・AIによるDX支援

近年、保険業界でデジタルトランスフォーメーション（DX）が大きな課題となる中、「マイクロサービス」という新たな技術をベースとする保険ミドルオフィスプラットフォームが注目を集めている。シンガポール発インシュアテックの日本法人である InsureMO ㈱（東京都港区）が提供するクラウドネイティブプラットフォーム「InsureMO」は、必要な機能だけを組み合わせることで構築できることから、とりわけアジリティを求める保険会社からの受注が増加している。河上勝社長に、同社の現在までの歩み、「InsureMO」の仕組みや特長、今後の展望などについて聞いた。

システムの柔軟性で競争優位に

現在、多くの保険会社は重厚長大な基幹システムをビジネスプラットフォームとして運営している。しかし、顧客ニーズが日々多様化し、事業環境の移り変わるスピードが加速する中、改修負担の大きさや柔軟性の低さが課題となっている。

そうした環境下で注目を集めているのが、InsureMO 社が提供する保険ミドルオフィスプラットフォーム「InsureMO」だ。商品開発の迅速性や社内外問わずさまざまなサービスと連携できる柔軟性、業務フローの変革に至るまで

保険業務に特化した機能を提供している。

コアテクノロジはクラウドネイティブの「マイクロサービス」で、数千個に及ぶ保険業務関連サービスの機能を最小単位の「部品」に分割し、それを API で連携して構築する。保険商品の構成を細かく設定することが可能な上に、新商品を短期間でリリースできる。また、新機能やサービスが容易に追加できるとともに、カスタマイズの変更の影響が極小化される。加えて、エンタープライズレベルで使用できるノーコード／ローコード

ECや異業種と連携した保険販売チャネル拡大

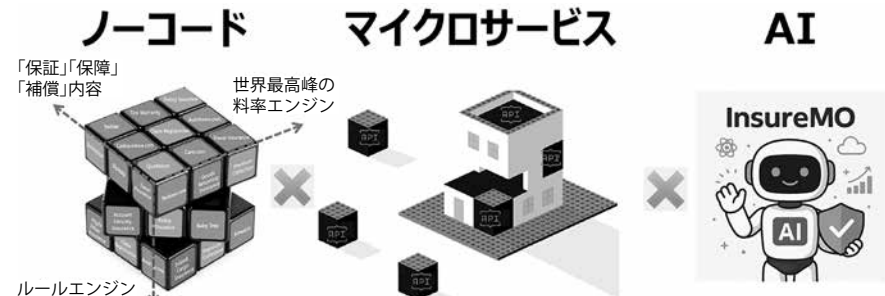
ードによるシステム構築アプローチにもなっている。

日本の保険業界には2020年に進出

InsureMO 社の日本の保険業界への進出は2020年からで、当初は外資系保険会社や少額短期保険会社の主力商

品、メガバンク系カード会社の保険ポータルサイトなどの DX プラットフォームに「InsureMO」が採用された。デジタル化社会にいち早く対応して、顧客に最適なカスタマーエクスペリエンス（CX）を提供するユーザーへの導入が進んだが、近年は大手保険会社の基幹システムのリリースなどの受注も増えており、現在は生保5社、損保8社、少額短期保険3社、クレジットカード・携帯電話会社4社の20社ほどがクライアントになっている。

グローバルでは保険会社を中心に500社超が導入しており、シンガポールではすでに市場の60%を占めている。とりわけ近年は、グローバル展開する生損保会社でのモダナイゼーションの事例が増えており、24年には世界で最もイノベーターなインシュアテック企業100社の1社に選ばれるなど高い評価を受け



「InsureMO」が提供する価値のイメージ

せて活用できる変額商品の機能を提供することで、保険会社は新たな保険商品のコアシステムを最新のテクノロジで立ち上げることができる。

変額保険は、資産形成商品の拡大や投資ニーズの高まりを背景に重要性が高まる一方で、特別勘定の設定やファンド管理、手数料ルールなど複雑なロジックを伴うため、従来の基幹システムで商品追加・仕様変更など新サービス展開を図ろうとすると、改修・運用の負担が大きい上、多額のコストが掛かる。「InsureMO」のコン

セプトに共鳴してエコシステムを形成している。ニーズ高まる変額保険も容易に構築

今年4月には、日本の保険会社に向けて変額保険商品対応のマイクロサービスをリリースした。ノーコードで設定できる変額保険の設定機能と専用 API の組み合わせ

「eMO」であれば、開発時間が従来の10分の1程度まで削減される他、ノーコード商品設計、マルチファンド対応、柔軟なルールエンジン、オープン API 連携といった特徴的な機能で顧客ニーズに十二分に応えることができる。もともと複数の保険会社の要望をきっかけに今回の新サービスを開

発しており、すでに大手生命保険会社での導入が進んでいる他、今後は外貨建商品など他の投資性保険に加えて、個人型 DC・年金商品といった資産形成・運用系商品のラインアップへの適用を予定している。

保険特化の AI 機能開発、マイクロソフトと連携も

また6月には、今や業務変革に必須となっている AI（人工知能）でも保険に特化した機能を開発した。業務効率化と不正検知の領域での活用を見込んでおり、チャットボットや自然言語処理、ルールベース+LLM による判断支援が可能だ。

加えて、API 連携により既存システムと統合できるため、より業務に入り込んだ AI 活用が期待できる。

さらに、マイクロソフト社のサービスと連携した AI 活用も可能となった。AI 活用でのパートナーを選定する「Azure AI Foundry Agent Service」は、保険会社向けソリューションベンダーとして唯一、InsureMO 社の技術が採用された。すでにチャットボットを活用した社内外の業務効率化を国内保険会社に向けて展開している。

「保険を簡単に」

順調に日本の保険業界で導入が進んでいる「InsureMO」だが、河上社長は、マイクロサービスの理解がまだ進んでいないことを課題と認識している。特に保険システムの分野において、本来の意味でクラウドネイティブプラットフォームを提供しているのは全世界で自社のみだと自負しており、同じくクラウドベースのプラットフォームをうたう同業他社の製品との違いは明白だが、実際に「InsureMO」を採用してもらうまで、迅速でスクラブルなシステム構築や、トータルコストを非常にリーズナブルに抑えることなどのメリットをなかなか分かってもらえないという。河上社長は「保険会社は今、営業職員チャネルや代理店チャネルでの保険販売が厳しい時代になっており、デジタルを通じてさまざまな顧客やマーケット、またパートナーとつながることが求められている。しかし、現在のモノリシックなシステムがそれを阻んでいる。『保険を簡単に』というミッションの下、保険会社のビジネス変革を支援してきた当社の持つテクノロジはその一つの解決策になると考えており、『InsureMO』をぜひ試していただければと思う」として、さらなる普及に意欲を示している。